



日本音楽教育学会ニュースレター

目 次

1. 報告・お知らせ

1-1 平成19年度総会議事録	2
1-2 平成19年度第2回理事会報告	7
1-3 「役員選出のための理事会」議事録	11
1-4 編集委員会からの報告・お知らせ	12

2. 大会のご案内・報告（日本音楽教育学会関係）

2-1 第38回日本音楽教育学会岐阜大会を終えて	14
--------------------------------	----

3. 海外トピックス

3-1 国際交流委員会 海外の動向 その5 イギリスの音楽教育事情について	15
3-2 ISME第28回世界（ボローニャ）大会とツアー企画について	17

4. 事務局からのお知らせ	18
---------------------	----

編集後記	19
------------	----

1. 報告・お知らせ

1-1 平成19年度総会議事録

日時：平成19年11月10日(土) 16:15~17:20

会場：岐阜大学全学教育講義棟105教室

開会に先立ち、有本事務局長より定足数302（会員総数の5分の1）を超えることが確認され、規定により総会が成立した。（出席者83名、委任状と合わせ総数328名）

1. 開会の辞（加藤副会長）
2. 挨拶（坪能会長・吉田次期会長）
3. 議長選出
安田香氏（岐阜聖徳学園大学）が選出された。
4. 報告

(1) 会務報告（有本事務局長）

以下の通り、昨年度大会以降の会務が報告された。（2007年6月30日までの会務はすでにニュースレターに掲載されており、ここでは省略）

7月8日	第2回常任理事会・理事会（日本女子大学） 日韓合同ゼミナール実行委員会（日本女子大学）
7月10日	会長選挙再投票締切
7月14日	会長選挙開票
8月5日	第2回編集委員会・学会誌検討委員会（静岡大学）
11月9日	第2回理事会・日韓合同ゼミナール実行委員会（岐阜大学）
11月10日	第1回国際交流委員会・次期理事会（岐阜大学）

(2) 選挙報告（中館選挙管理委員長）

以下の資料に基づき、第18期会長・副会長選挙の経過が報告された。なお、会長被選挙者名簿の誤りによる会長選挙の再投票となった経過、及び会長・理事選挙結果再通知となったことについて委員長から説明があり、委員会より陳謝の意が表明された。

会 員 各 位

日本音楽教育学会
選挙管理委員会委員長 中 館 栄 子

第 18 期会長・理事選挙の経過報告

3月13日(火)	第1回選挙管理委員会 前選挙管理委員長からの引継ぎ, 今後の手順の確認
6月9日(土)	第2回選挙管理委員会 会費納入確認, 選挙資格者・被選挙資格者決定, 印刷物確認
6月16日(土)	第3回選挙管理委員会 選挙投票用紙封入発送
6月30日(土)	第4回選挙管理委員会 理事選挙投票締切, 会長再選挙投票用紙発送
7月10日(火)	会長選挙再投票締切
7月14日(土)	第5回選挙管理委員会 会長・理事選挙開票
8月10日(金)	第18期会長・理事選挙結果通知発送
9月7日(金)	第18期会長・理事選挙結果再通知発送

会長選挙再投票, 会長・理事選挙結果再通知についての経過説明とお詫び

《会長選挙再投票について》

6月20日, 6月16日付で発送した会長被選挙者名簿に誤りがある, と複数の理事よりご指摘があった。

その誤りとは, 平成18年10月28日に改正された会則附則2項の「この会則実施後最初に行なわれる役員選挙の際, 現に役員である者の再任については改正前の会則第11条の規定を適用する」及び, 改正前の会則第11条「本会の役員の任期は1期3年とし, 再任を妨げない。ただし, 会長は1期とし, 副会長と理事およびその役員は連続2期を越えないものとする」という新, 旧の会則が反映されていなかったことによる。

そこで急遽, 選挙管理委員会では会長被選挙者名簿を訂正し, 会長選挙の再投票を行なうことを決定した。再発送準備の日数及び会員の混乱を最小限度に留めるために, 投票締切日6月30日に会長選挙の再発送作業を行ない, 会長選挙投票締切のみ7月10日に変更し, 開票は会長・理事共に7月14日に行なった。

《会長・理事選挙結果再通知について》

8月15日, 当選者より, 選挙結果通知について, 投票日, 開票日, 任期などが明記されていないこと, 選挙結果通知であるのに会長名が連記されていたり, 事務局からの連絡事項が記載されていたことなどのご指摘があった。

選挙管理委員会ではそのことを真摯に受け止め、内容を訂正し、9月7日に会長・理事選挙結果再通知を発送した。

上記のように、この度の会長・理事選挙において、あつてはならない大きな誤りが生じてしまい、会員の皆様に多大なご心配とご迷惑をお掛けした上、会計の損出を招いてしまいました。心よりお詫び申し上げます。

(3) 編集委員会報告（小川編集委員長）

投稿数の増加により、委員会が多忙を極める様子が報告され、第11号への投稿の呼びかけがなされた。

(4) 日韓合同セミナー実行委員会（加藤実行委員長）

実行委員会による準備は事務局長以下の委員の尽力により順調に進められ、現在、当日配布のパンフレットの編集作業を行っていることが報告されるとともに、会員への参加の呼びかけが行われた。

(5) 学会誌検討委員会（加藤委員長）

編集委員会から理事会に出された要望書に基づく会長からの諮問事項2件について委員会で検討した結果、1) 編集委員の人数については、2名増員し12名とすることが望ましい、2) 『音楽教育学』『音楽教育実践ジャーナル』をそれぞれ2号ずつ発行するという、現行の発行回数を維持する、との答申を会長に行った。

5. 協議事項

(1) 平成18年度会計報告（今川会計担当）・監査報告（伊藤会計監事）

大会プログラム p.86・87 をもとに報告が行われたが、「VI 選挙積立金」について以下の訂正がなされた。また、監査の結果会計報告に相違ないことが報告された後、会計報告が承認された。

<誤>

平成17年度までの積立金	¥ 70,141	←誤（これは16年度までの積み立て金額）
平成18年度積立金	¥ 150,000	
現在高	¥ 220,141	

<訂正後>

平成17年度までの積立金	¥ 220,141
平成18年度積立金	¥ 150,000
現在高	¥ 370,141

(2) 平成20年度事業計画（有本事務局長）および予算（今川会計担当）

以下のとおり、平成20年度事業計画が示され、承認された。

平成 20 年度事業計画

(※ 月日は未定)

平成 20 年 5 月中旬	平成 19 年度会計監査 平成 20 年度第 1 回編集委員会 平成 20 年度第 1 回常任理事・理事会
6 月上旬	研究発表(口述)・共同企画申し込み締切
6 月下旬	学会誌第 38-1 号発行・ニュースレターNo.32
7 月上旬	平成 20 年度第 2 回編集委員会 平成 20 年度第 2 回常任理事会
7 月中旬	研究発表受理通知
※	ワークショップ
8 月下旬	音楽教育実践ジャーナル Vol.6.No.1 発行・ニュースレターNo.33・大会プログラム

※	第 3 回編集委員会
※	第 3 回常任理事会・第 2 回理事会
※	第 39 回大会 会場：国立音楽大学

12 月中旬	学会誌第 38-2 号発行・ニュースレターNo.34
平成 21 年 2 月初旬	平成 20 年度第 4 回編集委員会 平成 20 年度第 4 回常任理事会
3 月下旬	音楽教育実践ジャーナル Vol.6.No.2 発行・ニュースレターNo.35

また、予算案(大会プログラム p.88)が説明され原案通り承認された。なお、支出の部の「次年度繰越金」の示し方について八木会員(埼玉大学)から質問があり、今後の検討事項となった。

(3) 国際交流委員会規定の改定について(坪能会長)

第 3 条及び第 4 条の一部改正が提案され、挙手により了承された(『音楽教育学』第 37 巻 2 号参照)。

(4) 次期役員について(吉田次期会長)

次期会長より、次の人事が提案され了承された。

副会長 北山敦康氏

事務局長 齊藤忠彦氏

常任理事 北山敦康氏、齊藤忠彦氏に加えて、

田中健次氏、小川昌文氏、杉江淑子氏、嶋田由美氏、三村真弓氏

会計監事 今川恭子氏、奥忍氏

(5) 第 39 回大会開催地(国立音楽大学)・日程について

藤沢氏(国立音大)より挨拶があり、2008 年 11 月 8 日、9 日の日程が示され、了承された。

(6) 第 40 回大会候補地について (坪能会長)

2009 年度の大会は、東京学芸大学で開催される予定であるとの説明があった。

(7) 40 周年記念事業について

第 40 回大会において授与する「学会賞」について、以下の資料に基づいて説明があり、了承された。なお、賞金について質問が出され、それについては引き続き検討することとした。

学 会 賞 に つ い て

- 1 学会 40 周年を記念し、日本音楽教育学会に学会賞をおく。
- 2 2 年に 1 回、学会賞の受賞者を決定する。
- 3 過去 2 年間に『音楽教育学』及び『音楽教育実践ジャーナル』に掲載された研究論文の中から 1 編を選ぶ。
- 4 審査委員は、当該期間の学会誌編集委員長、学会誌編集委員で常任理事、理事の経験者の中から、研究分野・方法を考慮して、会長が 6 名（会長を加え 7 名）を指名し、常任理事会で決定する。
- 5 審査委員長は委員により互選する。

第 1 回学会賞について

- 1 第 1 回の受賞論文は、2005 年度から 2008 年度にかけて（過去 4 年間）『音楽教育学』及び『音楽教育実践ジャーナル』に掲載された研究論文の中から 1 編を選ぶ。
- 2 審査委員
小川 容子（2007 年度編集委員長）
木村 次宏（2005-2006 年度編集委員長）
坪能 由紀子
村尾 忠廣
安田 寛
吉田 孝（2008-9 年度会長）
2008-2009 年度編集委員長
- 3 審査委員長は委員により互選する。

4 日程

- | | |
|----------------|----------------------------------|
| 2009 年 2 月頃 | 第 1 回審査委員会
委員長の決定、審査のための細目を決定 |
| 2009 年 5 月頃 | 第 2 回審査委員会
受賞者の決定後、受賞者に通知 |
| 2009 年 7 月 | 理事会にて報告 |
| 2009 年 8 月 | ニュースレターで発表。 |
| 2009 年 10~11 月 | 大会総会において、授与式 |

5 その他

- ・受賞者には賞状の他，賞金として3万円を授与する。
- ・学会賞については，会則には含めず，新たに規定を設ける。

(8) 編集委員会規定の改定について（坪能会長）

上記報告事項(5)で説明された，学会誌検討委員会の報告に基づいて編集委員会規定の改定が提案され，第3条の委員定数に関する改訂が挙手により承認された（『音楽教育学』第37巻2号参照）。なお，この件に対し問題解決への実効性について質問があり，学会誌検討委員会委員長から会長への答申内容について補足説明が行われ，外部エディター，参事を積極的に活用すること，学会誌検討委員会は今後も継続することなどを答申に加えたことが述べられた。

6. 議長解任

7. 閉会

1-2 平成19年度第2回理事会報告

日時：平成19年11月9日(金)14:00～17:00

会場：岐阜大学全学共通教育講義棟

出席：有本，今川，小川，奥，加藤，阪井，篠原，島崎，嶋田，坪能，寺田，降矢，南，村尾，安田，若尾，中村（事務局）

欠席：井口，岩井，岩崎，木村，熊木，佐野，田邊，中山，宮野，山本

委任状：岩崎，木村，熊木，佐野，田邊，宮野

記録：安田

【報告事項】

1 会務報告（有本）

「総会資料1」の確認で代える。

2 選挙管理委員会報告（中館→有本）

選挙管理委員長の中館が欠席のため有本が代わって資料「第18期会長・理事選挙の経過報告」，「会長選挙再投票，会長・理事選挙結果再通知についての経過説明とお詫び」に沿って説明。

個人情報の取り扱いに関して，一般に会員名簿の使い回しなどの問題が存在するという指摘があり，本学会の選挙人名簿については問題がないことが確認された。

3 各委員会報告

(1) 編集委員会（小川）

投稿原稿の査読等の状況について以下のように報告された。

『音楽教育学』は査読が3件，『音楽教育実践ジャーナル』は査読が3件。

『音楽教育学』Vol. 37 No. 2 には2件が採択された。

『音楽教育実践ジャーナル』は投稿が7件で7件採択、内4件は特集への原稿として採択。なお、次の『音楽教育実践ジャーナル』の頁数が150頁に増えたことについて予算上の問題が討議され、とりあえず問題がないことが確認された。

(2) 音楽文献目録委員会 (山下→有本)

最新号が出来上がっており、今大会で販売される。

(3) 国際交流委員会 (奥)

懸案だった英文のホームページの登載が実現した。

ISME の次のボローニャ大会は、参加者が多数見込まれるのでグループ旅行を日本旅行が企画、本学会には後援を依頼する予定になっている。委員会は11月10日に開催し、副委員長を決める予定。

(4) 学会誌検討委員会 (加藤)

会長への答申を出したので、協議事項で検討して欲しい。

(5) 日韓合同ゼミナール実行委員会 (島崎)

本日の12時から13時45分まで行った。準備は進んでいるが、現在までのところ参加申込者が非常に少ない。理事は積極的に参加を募って欲しい。

4 40周年記念事業

(1) 40周年記念誌 (岩崎→坪能)

順調に進行中。関係者は大会等の写真を送って欲しい。

(2) 40周年記念論文集 (今川)

欠席の委員長に代わって今川が報告。2月10日以来委員会は開いていない。6月発行のニュースレターで募集を案内し、現在募集中。締め切りは2008年3月末日。

(3) 学会賞 (坪能) : 協議事項で検討。

5 例会報告 (各地区担当理事)

各担当理事から例会の報告がなされた(詳細は『音楽教育学』第37巻2号を参照)。

今後開催予定の地区については、順次ホームページにて掲載する予定。

6 第39回大会日程、第40回大会について (坪能・加藤)

第39回大会日程を開催校からの要請で11月8日~9日とする。40回大会を東京学芸大学で引き受けることについて東京学芸大学の音楽教育の教員に諮ってあるが、日程等具体的なことは未定である。

7 新理事への引き継ぎ・次期委員会体制について (坪能)

2008年3月で任期の切れる編集委員と国際交流委員については、2008~2009年度の委員を今期の理事会が推薦することが確認された。

【協議事項】

1 18年度決算の訂正について (奥・今川)

特別会計の選挙積立金残高の誤りについて資料に沿って説明とお詫びがあり、総会で報告、了承を得る旨の説明があった。

2 国際交流委員会規程の改定について (有本)

第3条の委員構成について、理事会が推薦する委員を3名から4名にし、常任理事の互選に

よる委員 1 名を削除すること。それに伴う必要な訂正を第 4 条について行うことが了承された。

3 39 回以降の大会運営について (坪能・島崎)

(1) 大会実行委員会と本部事務局との担当分担について

資料「全国大会開催についての学会本部と大会実行委員会との覚え書き」に沿って協議。「覚え書き」1.4 及び 1.6 に関しては以下のように訂正。

1.4 大会実行委員会は、1.3 に挙げた催し以外の、基調講演、シンポジウム（講演を含んでもいい）、院生フォーラム、アトラクション、懇親会等の催しの企画・運営について責任を持つ。

1.6 大会実行委員会が企画した催し（シンポジウム、基調講演など）の『音楽教育学』大会特集号への掲載原稿作成、およびニュースレターの大会報告原稿作成については、大会実行委員会が責任をもち、担当分担については今後理事会などで逐次検討する。

(2) 共同企画の学会誌掲載について

ニュースレター29号の表記を、次のように訂正する。

「共同企画については、今後学会誌に掲載する方向とし、詳細は新体制で検討する。」

4 2008～2009 年度プロジェクト研究について (奥, 村尾)

今のところ企画がまとまってないので、次の常任理事会に引き継ぐ。

5 学会誌検討委員会答申 (加藤)

資料「学会誌検討委員会答申」に基づき、「編集委員の人数については、2 名増員し 12 名とすることが望ましい。」こと、『音楽教育学』と『音楽教育実践ジャーナル』の発行回数については、現行の発行回数を維持し、外部エディター、参事を積極的に活用すること、学会誌検討委員会は今後も継続することなどの説明があり、了承された。

6 40 周年記念事業

学会賞について (坪能)

日程を確認。

2009 年 2 月頃 第 1 回審査委員会： 委員長の決定、審査のための細目を決定

2009 年 5 月頃 第 2 回審査委員会： 受賞者の決定後、受賞者に通知

2009 年 7 月 常任理事会に報告、承認

2009 年 8 月 ニュースレターで発表

2009 年 11 月 大会総会において授与式

審査委員については、すでに決定している木村次宏（2005-6 年度編集委員長）、小川容子（2007 年度編集委員長）、吉田孝（2008-9 年度会長）以外の 3 名について、村尾忠廣、坪能由紀子、安田寛とすることが了承された。

7 後援依頼について (村尾)

安達真由美会員からの「第 10 回国際音楽知覚認知会議」後援依頼が了承された。

8 地区例会報告について (寺田)

学会誌の地区例会報告に関して地区によって掲載頁数に著しい増減があることについて、今後は「概ね 2 頁」を守ることを確認した。

9 リポジトリ制度について (有本)

現時点ではさまざまな問題が予想されるので引き続き検討。

10 入会員および退会者の承認（有本）

以下の通り承認。

新入会員（平成 19 年 7 月 8 日以降，24 名）

会員番号	氏名	所属先
3457	中村 直	ワタナベエンターテイメントカレッジ
3458	伊丹 晶子	福岡教育大学附属福岡中学校
3459	田中 義久	福岡教育大学(院生)
3460	田嶋 勉	柏市立柏高等学校
3461	片岡 由貴枝	よみうり文化センター
3462	織原 秀治郎	新座市立第三中学校
3463	磯部 澄葉	愛知教育大学(院生)
3464	石出 和也	北海道斜里高等学校
3465	神原 香代	広島大学(院生)
3466	重森 栄理	北広島町立本地小学校
3467	山本 紗弓	鳥取大学(院生)
3468	加戸 敬子	兵庫教育大学(院生)
3469	小川 博久	聖徳大学
3470	大沼 郁子	日本女子大学(院生)
3471	河合 紳和	静岡県立静岡南高等学校
3472	申 咏梅	広島大学(院生)
3473	根本 寛	横浜国立大学(院生)
3474	中園 佐和子	山口大学(院生)
3475	丸山 晶子	きのくに国際高等専修学校
3476	阿部 信行	くらしき作陽大学
3477	新垣 頼子	琉球大学教育学部附属中学校
3478	岩本 静香	金城大学社会福祉学部こども専攻
3479	斎藤 恵	大妻女子大学
3480	杉谷 怜子	金沢大学(院生)

学生会員（1 名）

会員番号	氏名	所属先
B-51	佐野 一美	新潟大学

申し出退会者（平成 19 年 7 月 8 日以降，4 名）

会員番号	氏名	所属先
2423	河合 環	
2589	安田 実佐子	
2807	中島 奈穂子	長野県短期大学
3162	手島 育	

2007 年 10 月 30 日現在 正会員数：1509 名

12 その他

佐野靖氏より、40周年記念論文集委員長および委員を一身上の理由で辞任したいとの申し出があり、了承された。委員の補充は行わない。後任委員長については、本理事会終了後、残りの委員で協議決定することになった。

1-3 日本音楽教育学会・役員選出のための理事会議事録

日時：平成19年11月10日（土）

場所：岐阜大学会共通講義棟第一会議室

出席者（17名）：吉田孝，尾藤弥生，降矢美彌子，坪能由紀子，八木正一，筒石賢昭，藤沢章彦，田中健次，小川昌文，齊藤忠彦，村尾忠廣，北山敦康，杉江淑子，安田寛，吉富功修，三村真弓，津田正之

欠席者（4名）：佐野靖，嶋田由美，井口太，岩崎洋一

*理事20名中16名が出席。理事定数20の4/5で成立。

議事

(1) 副会長の指名

- ・次期会長から、北山敦康（静岡大学）を副会長に指名するとの報告があり了承した。

(2) 事務局長の選出

- ・次期会長の提案により、齊藤忠彦（信州大学）を事務局長に選出した。

(3) 常任理事の選出

- ・次期会長の提案により、以下の7名を常任理事に選出した。
北山敦康（静岡大学），田中健次（茨城大学），小川昌文（横浜国立大学），杉江淑子（滋賀大学），嶋田由美（和歌山大学），三村真弓（広島大学），齊藤忠彦（信州大学）
- ・学会会則では、常任理事9名と記されているが、この解釈は9名までということである。当面は常任理事7人と会長の8名で常任理事会を構成する。

(4) 会計監事の委嘱

- ・次期会長の提案により、奥忍氏（岡山大学），今川恭子氏（立教女学院短期大学）に会計監事を委嘱することを決定した。

(5) 任期開始までの課題について

- ・北陸地区選出理事が事務局長を兼ねるため、北陸地区のサポートを関東地区の理事に分担してお願いすることが承認された。
* 関東地区選出の理事の協議により、関東地区担当を筒石賢昭氏（東京学芸大学），北陸地区サポートを八木正一氏（埼玉大学）が分担することになったとの報告があった。

- ・ 常任理事，理事の役割分担については，次回の会議で決める。

(6) 今後の予定

- ・ 2008 年度第 1 回理事会は，平成 20 年 4 月に開催予定。

1-4 編集委員会からの報告・お知らせ

編集委員会委員長 小川容子

【報告】平成 19 年度第 3 回編集委員会

11 月 9 日に，岐阜大学で本年度第 3 回目の編集委員会（平成 19 年度第 3 回編集委員会）がおこなわれ，以下の事項について協議しました。

1. 投稿原稿の査読状況について
「音楽教育学」では，査読が 3 件あります。
「音楽教育実践ジャーナル」では，査読が 7 件あります。
2. 投稿原稿の査読結果について
「音楽教育学」では，2 件の原稿が採択となりました。
「音楽教育実践ジャーナル」では，7 件の原稿が採択となりました。
7 件のうち 4 件は，「特集への投稿原稿」として採択することにしました。
3. 「音楽教育実践ジャーナル(通巻 10 号)」の進捗状況等について
4. 「音楽教育実践ジャーナル(通巻 11 号)」の内容等について
5. 「音楽教育学 第 37 巻—2 号」の進捗状況等について
6. 「音楽教育学 第 38 巻—1 号」の今後の作業予定等について
7. 学会誌検討委員会の報告
8. その他

<お知らせ>

最近，『音楽教育実践ジャーナル』への特集投稿ではないのだけれど，投稿してもいいでしょうか，というお問い合わせをよくいただきます。「もちろんです。ご投稿お待ちしております。」と回答しております。特集への応募原稿は大変有難いことですが，教育現場での具体的な問題を俎上にあげていただく自由投稿も大歓迎です。実践報告，教材研究，提案…といった「種類」については，投稿者の皆様と一緒に考えて，最もふさわしいネーミングを選びたいと思っております。たくさんの方の原稿，お待ちしております。

<お詫び>

学会誌『音楽教育学』では「例会報告」として，それぞれの地区での活発な交流・動向についてお知らせしております。個人の研究発表，ディスカッション，ワークショップ，講演など，お寄せいただく原稿の行間からは，さまざまな趣向を凝らした各地区の思いが伝わってきます。実はこのところ，それらの思いをお伝えするにあたって，少々不公平が生じておりました。申し訳ございませんでした。この場をお借りして関係者の方々にお詫び申し上げます。今後は，各地区「2 頁程度」で，お知らせしていきたいと思っております。分量は少なめに，でも，熱い思いはそのままに。

『音楽教育実践ジャーナル』 Vol. 6
no.1 (通巻 11 号) 特集の原稿募集

『音楽教育実践ジャーナル』通巻 11 号 (2008 年 8 月発行) の特集に向け、下記のとおり要領で原稿を募集致します。どしどし原稿をお寄せください。

音楽教育において、子どもの主体性が重要であることはあらためて強調するまでもないでしょう。これまで、主体性は個の視点から捉えられ、それは集団とは対立的にとらえられる傾向にありました。子どもの音楽的興味や関心のありようは子どもによって違うのであり、集団の音楽活動は子ども一人ひとりの音楽的な欲求を抑圧する、と考えられてきたように思います。例えば、幼稚園教育要領において保育者の役割は子どもの主体的な表現を「援助」するものであると明記されて以来、幼稚園や保育所のクラス全員で歌う活動が急激に減少していった事実は、そのことの典型的な表れでしょう。また、小学校以上の教育において、合奏や合唱が指導の熱心さのあまりに集団性を先行させることになり、結果的に一人ひとりの音楽的な欲求を抑圧しかねない状況を生むこともあったように思われます。

けれども、多くの民俗音楽やさまざまな音楽文化が示しているのは、音楽表現が本来は人々が自ら声を合わせ、互いの発するリズムに共鳴し合い、響き合いながら展開され、そこにおいてはリズムや響きが単なる個人を超えて、その集団や社会の共同のものとして表現されるということです。そのような音楽文化においては、集団で歌ったり演奏したりするときはもちろんのこと、ひとりで歌ったり演奏したりするときでさえ、共同体という集団の生活や気分を反映しているということも伺うことができます。

そうだとすれば、学校や就学前の教育活動

において、いまいちど、集団の表現と個の表現の関係を問い直してみる必要があるのではないのでしょうか。学校や就学前教育における集団が、子ども一人ひとりの主体性を必ずしも抑圧するのではなく、むしろ、集団であることによって子どもの自発的な音楽的欲求が喚起され、興味や関心、意欲が育って行く可能性もあるのではないかと考えます。もし、そうだとすれば、どのようにすれば、それが可能なのでしょうか。子どもたちが互いに響き合い、共鳴し合いながら自発的な表現を展開させてゆくことは、教師や保育者のどのような関与のあり方によって可能になるのでしょうか。11 号では、そのような実践例について考察した論考を募集したいと思います。

もちろん、子どもの主体性を尊重しようとするなら、集団は個を抑圧してしまうので、子ども一人ひとりの表現の方が集団の表現よりも重要である、というようなお考えをお持ちの方もいらっしゃると思います。11 号では、そのような論考も歓迎し、音楽の学びや遊びにおける集団と個という視点からのいろいろな論考を掲載できれば幸いです。会員の皆様の投稿をお待ちしています。なお、投稿の際には、特集への募集原稿であることを必ず明記してください。

●特集タイトル：「音楽表現における集団と個の関係を問い直す—響き合い、共鳴し合って育つ表現を求めて—」

●投稿原稿締切：2008 年 4 月末日必着

●その他：書式、字数等は『音楽教育実践ジャーナル』投稿規定をご参照下さい。採択された原稿については、編集委員会から 5 月末日までに投稿者に連絡いたします。

2. 大会のご案内・報告（日本音楽教育学会関係）

2-1 第38回日本音楽教育学会岐阜大会を終えて

大会実行委員長 朝田 健

11月10、11日の両日開かれました日本音楽教育学会第38回全国大会（岐阜）におきましては300余名の参加をいただき成功裏に終えることができました。参加くださった皆様方、本部役員の方々、関係各位、そして実行委員のみなさんにお礼申し上げます。

一年半ほど前、坪能会長からから全国大会を岐阜で開きたいとの話をいただいたときには不安で、すぐにイエスの返事ができなかったのですが、松永事務局長を中心に何とかのりきることができました。当日は、前日までの雨の天気予報を吹き飛ばす天気恵まれ、またそれほど寒くなく、二日とも好条件で運営する事ができました。

岐阜の地に全国からどれだけの会員のみなさんに集まっていたのか心配していましたが、受付が間に合わないくらい朝早くから詰めかけてくださいました。九時の研究発表開始時にはどの会場も多くの方が参加されており、機器の準備、司会者と発表者との打ち合わせなどみてまわり、あわただしい中にも活気があり胸をなで下ろしました。

午前中はバスが到着するたび参加の方々の波がおとずれ、研究発表午前中6会場36件、ラウンドテーブル、プロジェクト研究発表2会場は、立ち見がでるくらい盛況な会場もありました。昨年から心配しておりました総会にも大きな教室を準備していましたが、たくさんの方が参加してくださり盛会でした。お茶が飲める休憩所と同じ部屋で開いた大学院生18名による院生フォーラム「ポスター研究発表」も昼休みの立ち会いの時間以外にも

多くの会員の方に見ていただき、発表の内容も力作が多く充実しており、質問なども多くあったようです。

第一日の午後六時から、岐阜大学教育学部長の挨拶をいただいて懇親会が開かれました。これも多くの方の参加をいただき熱心な意見交換がされました。坪能会長の挨拶と次期吉田会長の挨拶もあり盛会でした。「飛騨牛が残っていますよ、料理を食べて下さい」の声も及ばず熱心な意見交換に花が咲き、料理が多く残ったのは残念でした。

そして第二日午前、研究発表6会場36件、午後、シンポジウム、高須一先生の講演、と小泉英明先生（日立製作所）、片寄晴弘先生（関西学院大学）、富田篤先生（打楽器奏者）の三人によるパネルディスカッション「感動を脳科学する」が開かれました。例年と異なり大会の都合でシンポジウムを二日の午後にしたのにもかかわらず、会場には多くの方が集まってくださり、熱心に講演と討論に聴き入っていました。

多くの方から受付、会場系の学生へのお褒めのことばをいただきましたことを加えさせていただきます。愛知教育大学の院生さんと岐阜大学の院生、学生さんです。ありがとうございました。

最後に、本大会開催にあたりご協力くださいました、岐阜観光コンベンション協会、岐阜土産物協会、後援の岐阜大学、ブースを出していただいた業者のみなさん、学会事務局、実行委員のみなさんどうもありがとうございました。

3. 海外トピックス

3-1 国際交流委員会 海外の動向 その5

イギリスの音楽教育事情について

塩原麻里（東京学芸大学）

1. イギリスの音楽教育の最近の動向

イギリスでは、前ブレア首相から現ブラウン首相への政権交代に伴い、大幅な政府諸機関の再編成が進められている。日本の文部科学省にあたる旧教育技能省 Department for Education and Skills は、2007年6月から子ども・学校・家族省 Department for Children, Schools and Families, DCSF となり、以前、教育と共に置かれていた技能の部分は、技術革新・大学・技能省 DIUS と、職業・事業・法規改正省 DBERR の中に再編されている。

今年に入って、2007年版ナショナルカリキュラムが発表され、話題となっている。音楽においては、5歳から7歳までのキーステージ1、7歳から11歳までのキーステージ2の内容に関しては、1995年に改訂された現行の第二次改訂版のままで教えられることになっている。しかし、中等教育における11歳から14歳までのキーステージ3の内容が、大幅に改訂されている。キーステージ3では第二次改訂時から政府が取り組んできた幅広く、豊かなカリキュラムの中で、英語、数学、科学の3つのコア科目の学力の向上を図る、というプロジェクトをさらに推し進める内容となっている。

2002年に出版された報告書、『成功している初等学校におけるカリキュラム』によると、芸術科目は生徒の想像力を刺激し、様々

な手段や材料を創造的に扱うことによって、生徒たちが自信を付けながら成長していくのを助けていること、そのために他の難しい課題に挑戦する気持ちを養い、学校に対して肯定的な気持ちを持たせることに貢献している、と報告している。

キーステージ3の新カリキュラムの概要を提示している『音楽：キーステージ3のための学習プログラムと到達目標』（2007）には、標語として「音楽は生徒が自分自身を理解すること、他の人と関わっていくこと、そして彼等の文化理解を育てること、家庭、学校、そしてより大きな世界とをつなぐ、重要な架け橋を作ることを助成する」という内容が掲げられている（p. 185）。新キーステージ3の音楽カリキュラムは、目標と共に音楽の重要性がまず示された後、

1. 重要な概念 key concepts,
2. 重要な過程 key processes,
3. 範囲と内容 range and content,
4. カリキュラムの機会 curriculum opportunities,

そして最後に、到達目標が示されている。第二次改訂版で発表されたレベル4、5、7、8、が示された後で、キーステージ3が一般的に目標とするべきレベル6の内容と特に優秀な成績 exceptional performance が掲げられている。

詳細は紙数の関係で本稿では触れない。興

味ある読者は以下の website を参照されたい。

<http://www.qca.org.uk/curriculum>

2. イギリスにおける音楽教育関連の学会

イギリスではナショナルカリキュラムが導入される以前から、精力的な音楽教育研究が行われてきた。本報告では教育・音楽・心理学研究学会 Society for Education, Music and Psychology Research (SEMPRE) と、音楽教育研究 Research in Music Education (RIME) という2つの代表的な学会について紹介する。

SEMPRE は、1966年に音楽能力テストの開発で著名なアーノルド・ベントレー Arnold Bentley が発起人となって創立された、レディング大学音楽教育研究学会 The Reading Conference on Research in Music Education が前身となって、1972年に The Society for Research in Psychology of Music and Music Education (SRPMME) として設立された学会が改名され、現在に至ったものである。

学会誌として1973年から Psychology of Music が発刊されているが、2007年からは、アジア-環太平洋地域のジャーナルである Research Studies in Music Education が SEMPRE と提携して発刊されるようになった。学会設立当時から音楽心理学を中心とした研究で数多くの先駆的な研究が発表され、世界的な研究者を輩出してきた。毎年10月に研究大会が開催されるが、2007年度はシェフィールド大学で、音楽に参加すること Musical Participation というテーマで行われた。会員を随時募集している。興味のある読者は、<http://www.sempre.org.uk> を参照されたい。

SEMPRE と共にイギリスの重要な音楽教育学会として、国際的に数多くの参加者を集めているのが、エクセター大学のスクール・オブ・エデュケーションが主催する音楽教育研究学会 Music Education Research (RIME) である。会員を募る学会ではなく、毎年4月にエクセター大学で開催される研究大会を中心に研究者が集まることで成立しており、研究者同士の自由な交流を通して、国内共同研究および国際的な共同研究の場を提供している。学会誌ではないが、同名の音楽教育研究 Music Education Research が関連研究誌として出版されている。

SEMPRE が音楽心理学に傾倒している学会であるのに対して、RIME はその標語に「音楽の教授と学習に関する全ての内容、すなわち、音楽発達、知覚と理解、創造性、学習スタイル、教授法、カリキュラムデザイン、非公式な音楽教育、障害者と音楽、テクノロジー、器楽教授、教員養成、ジェンダーと文化、について論議する」と書かれているように、音楽教育の全ての側面に関わる、幅広い視野に基づく研究を支持している。

そのような姿勢を反映してか、2007年4月10日から14日まで開催された第5回研究大会には、イギリスを筆頭に、ヨーロッパからドイツ、オランダ、デンマーク等を含め16ヶ国、アメリカ合衆国、カナダ、メキシコ、イスラエル、オーストラリア、ニュージーランドをはじめ、ブラジル、アルゼンチン、ケニヤ、南アフリカ、アジアからは香港、そして日本からは筆者が、というように約30ヶ国から参加者があった。基調講演も充実しており、Guy Claxton (ブリストル大学)、Lucy Green (ロンドン大学)、Estelle Jorgensen (インディアナ大学)、David

Myers (ジョージア州立大学), Meki Nzewi (プレトリア大学) の5人によって行われた。2008年については、研究大会は予定されていない。今後参加を希望する読者は、<http://www.education.ex.ac.uk> で情報を得ることができる。

3. イギリスで開催される今後の研究大会について

現在予定されているのは、経験主義音楽学シンポジウム Empirical Musicology である。

期間：2008年4月2日～3日

場所：ロンドン大学、音楽学研究所

Institute of Musical Research,

Senate House, University of London

基調講演:

Eric Clarke (シェフィールド大学)

Nicholas Cook (ロンドン大学、ロイヤル
ホロウェイ校)

ホームページ：<http://www.sas.ac.uk>

なお、SEMPRE のホームページでは、これから計画されていくイギリス国内における音楽教育に関する研究大会、シンポジウム、セミナー等について、逐次アップデートして情報を発信している。興味のある読者は定期的にご参照いただきたい。

3-2 ISME 第28回世界 (ボローニャ) 大会とツアー企画について

中地雅之 (東京学芸大学)

2008年7月20—25日に、イタリアのボローニャで音楽教育国際会議 ISME が開催されます。ヨーロッパ各国はもとより、世界中から様々な演奏団体が集まり、連日複数のコンサートが開催されます。英語による研究発表だけではなく、ワークショップなど、外国語が分からなくても全身で世界各地の音楽と音楽教育の現状を感じ取る絶好の機会です。国際交流委員会では、より多くの方に参加して頂くために、前回のマレーシア大会においては、ツアーの企画を旅行会社に依頼し、参加者から好評を得ました。今回も、引き続き日通旅行が ISME 研修ツアーを企画しています。

ツアーで参加されると、一人でも初めての方でも情報交換ができ、また万が一の場合に

も旅行会社にケアしてもらえます。面倒な手続きもいらず、前回は個人旅行より割安だったという参加者の声もありました。詳細は、下記ホームページをご参照下さい。

<http://www.nittsuryoko.com/travel/event/isme/index.html>

また、夏期研修として参加を希望する方には、必要に応じて勤務先等に派遣推薦状を発行するなどの措置も今後検討したいと考えています。詳細については逐次ご連絡しますので、お早めにご検討の上、多くの方の参加をお願いいたします。

4. 事務局からのお知らせ

「住所の変更について」

現在、学会誌等の発行物はメール便で発送しています。郵送ではないため、転居された後、住所の変更をされていない方は、転送されることなくすべて戻ってきています。

お手数ですが、住所の変更があった際には、必ず事務局までお届けくださいますようお願いいたします。

また、会費の振込用紙に記載されている住所と、事務局に登録されている住所が違う方がいらっしゃいます。本人から届出があつて初めて登録の変更をいたしますので、住所等連絡先の変更は必ず、メール・電話・FAXでご一報いただきますようお願いいたします。

<日本音楽教育学会 事務局>

※開局日時：月・火・金 10：00～16：00

〒184-0015

東京都小金井市貫井北町 2-5-22 ハイッシーダ 1-102

Tel: 042-381-3562 Fax: 042-381-3562

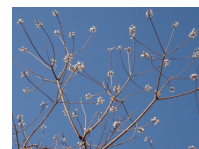
E-mail: onkyoiku@remus.dti.ne.jp

編集後記

日本音楽教育学会ニュースレターも、今回で第30号を数えることになりました。構想・企画の段階からかかわってきた者として感慨もひとしおです。ただし、編集を担当してきた者として、会員の立場に立って価値ある情報を、学会のさらなる活性化の一助となるような企画を、と常に心掛けてはまいりましたが、実際にはなかなか斬新な企画を出せなかったことを反省するばかりです。

これからの音楽教育学研究は、他の分野・領域の学会との交流や連携が不可欠になると思われまふ。本学会ニュースレターには、そうした横断的な情報もまた期待されているのではないでしようか。
(佐野 靖)

真っ赤に整然として燃えたっていた南京ハゼの街路樹が落葉してしまいました。街路樹には花も紅葉もありません。けれども、南京ハゼは落葉によって白い実を輝かせることになります。雪が積もった晴れた日には、それは白い花のようです。マフラーを首にまいて歩きたくなります。ロマンティックな散歩、ただし、この白い実には強い毒があるそうです。(村尾忠廣)



【日本音楽教育学会役員 2005-2007年度】

会長：坪能由紀子 副会長：岩崎洋一・加藤富美子

常任理事：有本(小山)真紀(事務局長)、佐野 靖・村尾忠廣(総務)

阪井 恵・島崎篤子・降矢美彌子(企画) 今川恭子・奥 忍(会計)

岩井正浩(編集委員)

理事：寺田貴雄(北海道)、宮野モモ子・井口 太・熊木真見子・山本文茂(関東)

篠原秀夫・中山裕一郎(北陸)、南 曜子(東海)

安田 寛・嶋田由美・若尾 裕(近畿)、小川容子・田邊 隆(中国四国)

木村次宏(九州)

参事：大沼覚子・駒久美子・祝田(夏目)佳子・裴珉卿・間瀬三奈・高鶴ゆら・前木洋美

栢沢未紗・味府美香

事務局：中村幸子・岩渕育子・山本華子・亀山さやか

【事務局住所】〒184-0015東京都小金井市貫井北町2-5-22ハイツシーダ1-102

【私 書 箱】〒184-8799東京都小金井郵便局私書箱26

Tel/Fax : 042-381-3562 e-mail : onkyoiku@remus.dti.ne.jp

<http://wwwsoc.nii.ac.jp/jmes2/index.html>

